

新

極上ご奉仕メイドまひるの場合

# エロエロ

小説 筆祭競介  
挿絵 わつきるみ

立ち読み版



序章	美少女メイドに押し倒されて
第一章	玉の興狙いの巨乳メイド
第二章	朝のベッドと夜のお風呂で極上ご奉仕
第三章	恋するメイドと初体験
第四章	レディなメイドにプロポーズ
第五章	愛するメイドとラブラブエッチ
終章	結婚しよう

## 登場人物紹介

Characters

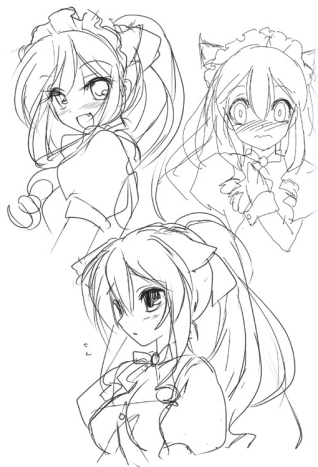


私のこのおっぱい  
気に入ってくれたみたいです♥

ひゅうが

### 日向まひる

澳風家でメイドとして働く少女。幼少時代に貧乏で苦労した経験があったことからお金持ちになることを夢見ていて、御曹司である夕祐と結婚して玉の輿になろうと誘惑してくる。



おくなぎゆうすけ

### 澳風夕祐

澳風家の跡継ぎの少年。普段は通っている学校の寮に住んでいるが、夏休みに実家に戻ってきた。



「ああっ。だ、だめ……そ、そんなに大胆に扱かれちゃうとお——はああん！」

そんな中、まひるは掌と男根との密着感をさらに強めて、扱くスピードもよりリズミカルなものに切り替えてきた。

「何がダメなんですかぁ♡ うふふふ♡ 坊ちやまよりも、ご主人さまの方が正直みたいです♥ こんなにガッチガチになって、もう私が欲しくつてたまらない、つてアピールしてきてますよぉ♡ ほうら、ここが気持ちいいんでしょ♡」

「はうん!!」

亀頭の裏側を親指の腹で大胆に擦られて、眉間に突き抜けてくるような愉悅が迸った。夕祐は気持ちよすぎて涙目になり、思わず己の股間に視線を向ける。

（うわああああ。ぼ、僕のがあんなにパンパンになっちゃってるぅ）

今まで見たことがないほど亀頭が真っ赤に充血し、竿肌には太い血管が浮いていた。

そんなグロテスクにさえ見える勃起ペニスに、まひるの白くて細い指がしつとりと絡みついている。

人差し指や中指の腹でカリの部分をなぞるように愛撫しながら、他の指は肉胴部分を巧みに擦り上げていた。

己の男性器が文字通り『ご奉仕』されている光景に、夕祐の目が恍惚と細くなっていく。「はああん♡ 今の坊ちやま、気持ちよすぎてたまらない、つてお顔をしてますよぉ♡」

耳元で甘く囁かれ、少年は己の股間から再びそちらに顔を向ける。

まひるはピンク色に上気した色っぽい美貌で、こちらをジッと見詰めていた。

「だ、だって……こ、こんなのお——んぐっ!!」

そして至近距離で見詰めあったまま、急に唇を塞いでくる。

しかも——ぬるるン♡

今度は舌まで入れてきた。

「ッッッッッ!!」

いきなり躍り込んできた味覚器官がこちらの舌を舐めた瞬間、頭髮が全て逆立つほどの凄まじい快感が炸裂する。

（何、今のー!!）

ディープキスがこれほど気持ちいいなんて、今まで思ってもみなかった。

まひるも自分と同じように感じているようで、舌同士が触れあった瞬間、大きな瞳を丸く見開く。口に出さずとも『気持ちよくって、びっくりしたー!!』とその表情豊かな瞳が叫んでいる。

「つぶふあ! ら、らめっ! このままだとイッチャうよおお!」

想定外だったディープキスの快感と、片思い相手が見せたその新鮮なりアクションに、射精のスイッチが入りかけてしまう。

「はああん♡ まだ、だ〜め♡」

するとまひるがパッとペニスから手を離す。

股間で絶え間なく発生していた肉悦の波が唐突にやみ、夕祐は「ふはぁッ」とまるで水から顔を上げた直後のように息をした。

しかし玉の輿を狙うメイドの責めが、これで終わるわけではない。

「坊ちゃま」

「……は、はい」

「今日、私と会ってから、ず〜っとこのおっぱいを意識してましたよね♡」

「なっ!? そ、それは……」

そうなるように仕向けたのは、そちらではないか。

だいたいこんなにも大きな胸を、あんな風に自ら擦りつけてきたり、揺らしてきたりすれば、男なら意識して当然だ。

「いいんですよ♡ 隠さなくってもお♡」

彼女はそう言いながら、横に寄り添う姿勢から急に起き上がった。

そしてメイド服の上着をはだけると、ブラも手早くズラし、いきなり胸をポロリと露出させてくる。

（うわああ!? こ、これが……おっぱい……）

初めて生で目にする女性のバストに、少年の視線は釘付けだ。

メイド服を着ている時から、その大きさはわかっていたが形の方も素晴らしい。

雪のように白く綺麗な乳肌が、中にたつぷりと詰まった柔肉によって、ピチピチに張り詰めているのがよくわかる。

細い鎖骨からなだらかにスロープを描いてピンク色の頂点へと至り、そこから下は綺麗な半球面となつて、そのずっしりと実った全重量を支えている。

緩みも歪みもまるで感じない、素晴らしい美巨乳だった。

「うふふふ♡ 私のこのおっぱい気に入ってくれたみたいですね♡」

彼女は思わせぶりの表情で、右手の人差し指を己の胸へと差し向ける。

そして指先を下乳に押し当てると、ゆっくりとそれをなぞり上げていく。

綺麗な丸い膨らみが、その動きに合わせて柔らかく形を変えていき、彼女の指先が半ばを過ぎると、プルンと重量感満点に元の形に戻る。

「……ゴクッ」

その乳肉の揺れ方を目にしただけで、ただ柔らかいだけでない、ねちっこい弾力感みたいなものが鮮明にイメージできて、夕祐は思わず生唾を飲み込んでいた。

「うふふふ♡ 私をお嫁さんにしてくれたら、このプルンプルンなおっぱいを、揉もうが吸おうが、毎日、好きにし放題ですよ♡」

「……も、揉もうが……吸おうが——ふぶッ!!」

自分がこの美巨乳を好きにしているシーンを思い浮かべただけで、鼻血を吹き出しそうになってしまう。

「ほーら、坊ちゃま。このおっぱいでいいことしてあげますから、もっと脚を広げて腰を上げてください」

いつの間にか、まひるはこちらの脚の間に移動して、そこで正座の格好をしていた。

「……えっ? こ、腰?」

「ほら、早くう」

「は、はい」

夕祐はまひるに急かされて、言われるがまま脚を開き、素直に腰を上げていた。

相手はメイドのはずなのに、この場の主導権は完全に彼女が握っている。

「よいしょ、つと。これでいいかな♡」

まひるはこちらが浮かせた腰の下に、正座したまま自らの両膝を入れてきた。

もういいですよ、と言われたので夕祐が腰を下ろすと、正座している足をさらににじり寄らせるようにして、こちらの大きく開いた股間と彼女の腹を接近させてくる。

「うわああ……ち、ちよつと……この格好……」

真上を向いてそそり立つ男根が、ちようど、彼女の胸の谷間に位置していた。



見慣れた己のペニスとこうして並べると、まひるのバストの大きさがよりはつきりと実感できる。

（……も、もしこのまま……あのおっぱいに挟まれたら……）

それを想像しただけで、男根がビクンとさらに強張る。

「うふふふ♡ もう何をするかわかったみたいですね♡」

「……う、ううう……そ、それはそのお……」

夕祐は恥ずかしさと期待感で、真つ赤な顔に泣き笑いのような表情を浮かべていた。

対してまひるはこちらが何も言っていないのに「大当たりい♡」と笑い、自らの乳房を脇から両手ですくうようにして、急に寄せあわせてくる。

「はうううう！」

突然、ペニス全面を襲った肉悦の衝撃に、夕祐は後頭部をベッドに叩きつけるようにして仰け反った。

（すっごく柔らかい！ でも、ただ柔らかいだけじゃなくて、なんか中身がとつてもむつちりしてるう！）

見るからに乳肌がパンパンに張り詰めていたが、なるほどと思わせる弾力だ。

とにかく物凄く気持ちいい。

これだけ大きいにもかかわらず、まだ成長しきっていない若い乳肉の粒子みたいなもの

が中にぎつしりと詰まっていて、独特の抵抗感を生んでいる。

「はああん♡ ご主人さまってば、おっぱいに挟まれた瞬間に、ビギッてすっごく硬くなっちゃったよぉ♡」

まひるのうつとりした声を聞き、夕祐は仰け反らせていた顎をゆつくりと引いた。

腰を彼女の膝の上に乗せているちよつと情けない格好のまま、改めて自分の股間に視線を向ける。

（うわあ!! やっぱり僕のが全然見えない！ 完全におっぱいに包まれちゃってる！）

相手の胸の大きさと、己のサイズを考えれば必然の結果だが、現実にごうして目にする、やはりインパクトのある光景だ。

加えて、まひるの指が左右から脇乳に深く食い込み、バストが谷間方向へむつちりと寄せあわされているのも、たまらなくエロティックに映る。

バストのボリューム感や、谷間の深さがより強調されたその姿に興奮し、中に埋まるペニスが一段と硬くなる。

「それじゃあこのおっぱいで、たろっつぶり気持ちよくなってくださいね♡」

すでもう充分気持ちよくなっているにもかかわらず、彼女はそう口にする、

——タプタプ、たぶたぶん♡

自らの乳房を掴んだ両手を揺するようにして、中のペニスを扱き始めた。

「はああん♡ ちよつ、と、そ、それ、す、凄い……っふああああ♡」

乳肌がとてもきめ細かくなめらかなため、肌同士が擦れあってもペニスに痛みはまるで感じない。むしろ乳肉の柔らかな感触をしっかりと感じられ、股間から快感色の電流が迸り続ける。

「どうですか、坊ちゃま♡ 私のおっぱい、気持ちいいですか♡」

「ら、らめっ。そんなにタプタプしちゃらめえええ」

「はああん♡ 気持ちよさそうにしている坊ちゃまつてば、やつぱり可愛い♡」

彼女はその瞳を嬉しそうに細めながら、両手で掴んでいる乳房を今度は左右別々に揺すり始めた。

「そ、そんなエッチなやり方……っくうう!! お、おっぱいがいろんな強さでおちんちんを扱ってきてえ——っくふあああ!」

肉先から根本までを、牝の柔肉によって扱かれるのは同じだが、ペニスにかかる圧力が変化している。

左右の乳房が上下に大きく離れている時は、肉棒全体に愉悅が及ぶ。

しかし上下別々に揺すられている柔肉が横に並んだ瞬間だけは、この特大バストの全重量が中の男根に一気に集中して、凄まじい肉悦の大波に襲われる。

——ズリズリ、たぷぷン! ぬぶ、タプタプたぷぷン!

男根にもたらされる肉悦の質と量が目まぐるしく変化するため、先ほどまでの一本調子なパイズリとは気持ちよさの深みが違う。

「あああああ！ も、もうダメ！ もうイッちゃいそうだよおお！」

夕祐はもう我慢がでず、思わず限界を叫んでいた。

しかし栗毛のメイドは自らの乳房を揺すり続け、パイズリをやめる気配がまるでない。

「はああん♡ いいですよ♡ このままおっぱいでイッちゃってください♡」

こんなことを言いながら、さらに激しく自らの特大バストを上下させ始める。

「ち、ちよつと！ こ、このままだと……ぼ、僕のが胸にかかっちゃいますよお！」

「うふふ♡ いいですよ♡ 将来、わたしのアソコの中でドプドプする予行演習だと思つて——今は思いっきり、私のおっぱいに中出ししてください♡」

「な、中出して……つくふあああああ!? そ、そんなのダメえええ！」

夕祐は彼女の膝の上に腰を乗せた格好のまま、そう叫んでいた。

自分が本気でダメだと思えば、この情けない格好をやめて腰を逃がせば済む話だ。

しかしこんな気持ちいいバストの谷間から、自らの意志でペニスを抜くことなど不可能だった。

「はあゝん♡ ご主人さまが私のおっぱいの中で、金属の塊みたいになって今ビクッてしてますう♡ これはどうです？ こんな感じの方がもっと気持ちいいんじゃないですか



あ？」

左右の乳房をダイナミックに揺すつていた彼女の動きが、さらに変わった。

バストを脇から掌で強くギュッと押し込みながら、両手を左右別々に一、二センチほど小刻みに揺すり出したのだ。

先ほどまでのパイズリで、左右の乳房が横に並んだ時だけに味わえた濃密な肉悦が、さらに密度を増して限界間近の男根を襲い続ける。

「だ、だめ！ イク！ 本当にイクっ！ ああああ！ もうイッちゃうううう！」

少年は結局情けない格好のまま、あられもない喘ぎ声を叫び、全身を息ませた。

柔らかな乳房に揉みくちやにされ極限まで硬直したペニスの中を、凄まじい肉悦を撒き散らし、灼熱の粘液が一気に駆け抜けていく。

——どりゅん！ どぶどぶッ！ どぎゅドブどぎゅドン！

異性の肉体によつてもたらされた初めての絶頂は、今までのオナニーでは到達することのできなかった、激しい脈動をもたらしした。

「ご主人さまがおっぱいの中でビクンビクン跳ね回って——はああん♡ これが殿方のエクスタシーですか♡ すっごく熱いのがいっぱい溢れ出てきてますう♡」

脈動中のペニスを丸ごと乳房で包み込んだままのまひるが、それを嫌がるどころか恍惚とした顔をしているのも、射精の快感をより深めさせている。



「ッッッッッ!!」

今までとのギャップの大きさが、そのまま自分に対する想いの強さだと思うと、たまらない気持ちになってくる。

(それじゃあ、僕からどんどんイッチャうよ!)

まひるがいつまでも胸のガードを解こうとしないので、夕祐は鼻息荒く彼女の下半身に手を伸ばし、メイド服のスカートをピラッと捲った。

「きゃん!!」

今まで夕祐が一度も聞いたことがない、可愛らしい裏声でまひるが悲鳴を上げる。

「もう! さ、さつきから恥ずかしいことばかりしてえ〜!」

しかも捲られたばかりのスカートを右手で押さえ、涙目になってジッとこちらを睨んでくる。夕祐の立場としては「好きにして」と言われたから、好きにしているわけで、決して非難されるようなことはしていないつもりだ。

と、普通の性格の男ならそう抗議でもするのだろうが、優しすぎる気性の夕祐では、何も言えず押し黙ってしまう。

そんなこちらの態度を見て、まひるも自分が言いすぎたと思ってくれたようだ。

「……もお、そんな切なそうな顔をしないでくださいよお〜」

彼女も困った顔になり、暫くモジモジした後、スカートを押さえていた右手をソッと



離してくれた。

「……あ、あの……続き、していいの？」

「……女の子に……そんなこといちいち聞かないでください。……こ、答える方が……恥ずかしいです」

彼女は顔を真っ赤にして唇を尖らせると、再びプイッと横を向いてしまう。

（あうう。なんだか今までの日向さんと全然違うよお）

一見すると、スネているように見える。

しかしそれが嫌じゃない。

むしろとても可愛らしく感じるのは、自分が彼女に心底惚れているからだろうか。

「それじゃあ……始めるよ」

夕祐は一応そう断って、再びメイド服のスカートを捲った。

その下から現れたのはピンクと白の縞々パンツと、健康的な肉付きをした長い脚だった。（日向さんって、脚もすごく綺麗なんだあ）

メイド服がミニスカートなだけにいつも気にはなっていたが、まひるの脚をじっくりと見るのはこれが初めてだ。

夕祐はまず手始めに、指先で太腿の外側をソッと触れてみる。

それだけで相手はビクッと敏感に身体を震わせたが、顔は横を向いたままで、こちらの

行為を止めようとはしてこない。

そんなまひるの様子を慎重に見計らってから、改めて掌を使い太腿まで撫でてみる。

（うわああ!? 肌がすぐくなくめらかで、中のお肉がピチピチしてる!）

まひるのことだ。幼い頃はこの両脚で、元気いっぱいに駆け回っていたことだろう。

そして今も、大先輩のサキが感心するほどの働き者である。

だからこそその健康的に発達した太腿であり、こうしてただ撫でているだけで、指先に極上の快感を味わえる。

「っはああん……。そ、そんなに……。あ、脚ばっかりい……」

その気持ちよすぎる手触りに、夕祐が夢中になって撫で回していると、まひるが身体をよじらせた。

「だって日向さんの脚、手触りがすごくいんだもん」

「だ、だからって……。ああん。手つきがエッチすぎだよお」

彼女は太腿を撫でられているだけで、腰のあたりからヒクンヒクンと小さく痙攣し、軽く息を乱し始めていた。

（わわわっ!? これだけでも、そんなに感じちゃうもんなんだ!）

想像以上の感度のよさに、少年はますます興奮してしまふ。

太腿でこれだけ感じるのなら——もし、アソコを責めたらどうなっちゃうんだろう？

考えが自然と過激な方へと向かっていく。

夕祐は太腿を撫でながら、自分の場所を彼女の脚の間に移動させた。そして脚を撫でていたその手を上に滑らせて、おもむろに彼女のショーツを掴む。

「ああっ!! ち、ちよっと! そんな急にダメ!」

こちらの意図を察したまひるが、慌てて両脚をキュッと閉じ、真っ赤な顔で夕祐を睨んでくる。

しかしいくら気弱な性格でも、ここまで気分が高揚しては簡単に引き下がれない。

こちらを真っ赤な顔で見詰めてくるまひるに対し、夕祐的には精一杯強く出て、

「……………だ、だめ?」

とオズオズと尋ねていた。

「ツツツツツ!!」

そんな自分のヘタれな態度に対し、栗毛のメイドは真っ赤な顔のまま唇を波立たせる。

一番恥ずかしいところを見られてしまう極限の羞恥心と、恋人の欲求を全て受け入れたいと思っっている健気な恋心。

そんな二つの感情が彼女の中で激しく交錯していることが、その眉間に刻まれた深い皺と、下唇の強い噛みつきっぷりでよくわかる。

(……………か、可愛い♡)

今夜、何度も感じていることだが、あっけらかんとしていた今までとのギャップが凄まじすぎる。

彼女はそのまま大きな瞳を左右に何度も踊らせて、たつぷりと逡巡した後に、

「……………いいですよ」

とキュッと閉じていた両足から力を抜いてくれた。

（やったあああああああ！）

夕祐は胸の内で快哉かいさいを叫ぶと、慎重に彼女のショーツを脱がしていった。

しかしすぐにその下着がベッドと尻の間に挟まるようになって、ひっかかってしまう。

「……ッッ」

まひるは今、両肘で己の胸を隠すようにしながら両手で顔を覆っている。

その状態のまま僅かに腰を浮かせて、見られて一番恥ずかしい部分を露出させることに協力してくれた。夕祐はそのままショーツを脱がすと、鼻血を吹き出しそうほど頭に血を上らせながら彼女の両膝を掴み、思いきって脚をM字に開かせる。

「……………ふにゆうう」

顔を両手で覆ったままのまひるが、心底恥ずかしそうな呻き声を上げる。

それでも彼女は自ら脚を閉じることなく、夕祐に一番大切なところを見せ続けてくれた。

（…………こ、これが…………女の子の…………ア、アソコ…………）

柔らかそうな栗色の陰毛がフサリと茂り、その下に初めて目にする女の秘裂が縦に走っていた。ふつくと厚みのある大陰唇が僅かに開き、その内側から濃いピンク色の牝褸が少しだけ覗いている。

その綺麗な色合いに、少年の目が自然と血走っていく。

「あ、あああの……アソコに……その……さ、さ触るよ？」

いちいち聞くなと言われたが、思わずそう尋ねてしまった。

まひるは女体をビクッと強張らせたが、何も返事をしてこない。

そのまま夕祐が返事を待ちつつアソコを食い入るように見ていたら——まひるが顔を覆っている両手の指を僅かに開いてチラッとこちらに視線を向けてくる。

「もう！　なんて顔して私のアソコを見てるんですかぁ！　そんな、おあずけを命令された子犬のような表情をされたら……どれだけ恥ずかしくっても嫌って言えないですよ！」

彼女は怒ったようにそれだけ言うと思いつき顔を背けてしまう。

しかし、脚は開いたままだ。

（え、えつと……つまり……）

触ってもOK。好きにして。という意味だろう。

簡潔に「いいですよ」と言わなかった相手のことを、とても可愛く感じてしまうのはなぜだろうか。

今までのストレートすぎる彼女の言動も魅力的だったが、恥じらいや照れがあるのもギヤップがきいていてたまらない。

「それじゃあ本当に触っちゃいますよ！」

夕祐はもう辛抱たまらなくなつて、鼻息荒く彼女の股間に右手の人差し指を差し向けていった。

「……ンッ!!」

大陰唇の一番厚みのある部分を指先で触れた瞬間、まひるが下唇を強く噛んで、女体を鋭くビクッと震わせた。

（なんか唇みたいな感じでプニッとしてた!）

ある意味、大陰唇、という名前通りの感触である。

童貞の夕祐には、とにかく初めて知ることばかりだ。

そのまま指先でプニプニし相手の反応を窺つてから、今度は両手の中指で慎重にそこを押し、左右にゆつくりと開いてみる。

（うわああ。なんか見ちゃいけないところを見てる気分だよ）

大陰唇の内側には、濃い桃色の小陰唇が重なりあっていた。

夕祐はドキドキと胸の奥を高鳴らせながら、ゆつくりと顔をそこへ近づけていく。鼻孔に漂ってくる爽やかな香りは、柔らかな陰毛から漂ってくるボディソープの残り香

だろうか。

しかしその奥に、甘酸っぱいような牝の香りが僅かに感じられる。

夕祐はその香りに引き寄せられるように舌を出し——レロン。

「っひゃあん!!」

牝の花弁を舐めた瞬間、まひるが甲高い声を上げて全身を大きくビクンと震わせた。

まるで激痛でも走ったような鋭すぎるリアクションだが、彼女が上げた声に不快な響きは微塵も混じっていないかった。

（気持ちいいんだよね！ 思わず悲鳴みたいな喘ぎ声が出ちゃうほど！）

夕祐はそう確信して、割れ目の内側にさらに舌を這わせていく。

桃色の小陰唇たちは想像よりも遥かに柔らかく、くねくねしていて、そして味はほとんどしなかった。

舐める行為だけで、夕祐が具体的な気持ちよさを感じるようなことはない。しかし——。  
「あっつくうう!! ら、らめッ!? そこは、らめえええ!!」

まひるの敏感すぎる反応が、少年の興奮を激しく煽る。

己の舌先が膣壁たちをねちつくく舐め上げると、大陰唇の横から太腿に向かって伸びている太い臍が、浮き上がるようにヒクついた。

（こんなの初めてだよ！ 僕の方から日向さんを感じさせられるなんて！）

彼女のヒクつきを感じるたびに、恋人に性的な喜びを与えられているという、牡としての強い満足感が全身を駆け巡る。

「……ん？」

そんな時、縦に割れている牝裂の先端部分に、米粒ほどの突起があることを発見した。

（こ、これって……クリトリスってやつ？）

大陰唇の内側からチュルンと舌を抜き、その性器に注目する。

「つくふああ……んっ……ッふああああ〜」

ずっと性器を舐められ続けていたまひるは、脱力したような吐息を漏らし、僅かに浮かせていた腰をベッドに落とす。

（さっきまでは、こんなのがなかったよね？）

どうやら性的な刺激によって、こんなに小さいのに勃起したらしい。

（ふわあああり。女の子も、こんな風になってるんだあ）

無性にそれが卑猥に感じられ、気付いた時にはそのぷっくりと膨れた牝芽に舌を伸ばしていた。

「んはああああああああ！」

舌先がその先端に触れた瞬間、まひるが背中を大きく反らせて絶叫する。

「ら、らめっ！ そこッ！ な、何なのこれええ！ 気持ちいいのがビリビリくるみたい



でええ——んはあああああああ！」

こちらの舌が小さな突起を舐め弾くたびに、彼女のグラマーな全身が大きくビクンビクンと震え続ける。

（うわああ！ 凄い敏感！ いいよ！ もっともっと気持ちよくなって！）

夕祐は両手で彼女の腰あたりをしっかり掴み下半身を押さえつけるようにして、クリトリスから牝裂の中心までを、何度もねちっこく舐め続けた。

それでも時折、まひるの腰が『くいん！ くいん！』と小さくしゃくり上げるように跳ね上がる。それと同時に鼻にかかったような甲高い喘ぎ声を「はああん！ ああああん！」と絞り出す。

（めちやくちゃ感じてる！ 日向さんが僕にペロペロされて、こんなにも！）

今までは一方的に責められるだけで、気持ちよくなるのは自分だけだった。

しかし今は違う。こんな官能的すぎる反応を見せられると、少年の目も自然と血走り、ますます舌の動きが激しくなってしまう。

「んんん!!」

すると牝裂を舐め回しているその舌先に、これまでなかった濃いヌメリを感じた。

そして、むせかえるような甘酸っぱい香りが、ムッと漂っていることにも気付く。

（うわわわわ!! 僕にペロペロされて、こんなにもアソコがビチャビチャになってる!）

たとえ童貞でも女性がどういう時に濡れるのか、知らない歳ではない。その具体的な生理現象を初めて目にして、たまらなく興奮してしまう。

「もう我慢できないよおお！」

恋人の愛液と己の唾液で口の周りをベタベタにしたまま、少年は顔を上げた。大急ぎでズボンと下着を脱ぎ、ヘソに付きそうなほどビンビンになった己の男根を解放させる。

「っふああ……はああ……夕祐クンのがあんなにい……」

そんなこちらの行動を、脱力状態のまひるがポーッとした顔で見詰めていた。

いつの間にか両手は横にダランと伸びていて、クンニ前は必死に隠していた豊かな乳房も今は丸見えになっている。

「このまましちゃうよ！ 日向さんとしちゃうからね！」

対して夕祐は先ほど舐めた彼女の愛液がまるで媚薬だったかのように、もう辛抱たまらない状態だ。

死ぬかもしれない、と思うほどボコボコにされたはずなのに、極度の性的興奮で今は痛みをまるで感じない。

相手の返事を待つことなく、右手で掴んだ男根をビショビショに濡れた牝華にせわしく差し向ける。

『んはぁん!?!』

先端が入り口に触れた瞬間、二人の口から同時に鋭い声が漏れて、ビクンと身体を震わせた。

まひるはそれまでトロンとさせていた瞳を細くして、こちらをジッと見上げてくる。  
「いい……よね？」

一刻も早く彼女と一つになりたい衝動に駆られながらも、さすがにそう確認を取る。  
まひるは頬の赤みを一層強くして、細めた瞳をさらに潤ませて、

「……うん♡」

と小さく顎を引いてくれた。そして――。

「私のバージンもらって♡」

その瞬間、夕祐の全身に感動の震えがゾクンと走る。

大好きな女の子から全てを捧げられた、という強烈な喜びが、小柄な身体だけでなく魂の奥底まで震わせた。

「優しく……してね」

「もちろん！」

夕祐はガクガクと頷くと、はやる気持ちを必死に抑えてゆっくり腰を突き始めた。

「ソっ……っんんん」

己の肉先が中に入っていくと同時に、まひるが強く下唇を噛みしめる。

そして彼女の両手がさがるようにこちらの肩を掴んできた。

（す、凄くキツイ……）

夕祐も奥歯を強く噛みしめて、慎重にペニスを埋めていく。

まひるの入り口はとても狭く、そして凄まじい締めつけだった。しかし大量の愛液でしっかりと潤っていて、強い抵抗感がありながらも亀頭がスムーズに入っていく。

（くううう）。熱くてヌルヌルで、めっちゃ気持ちいいよぉ）

夕祐はそれでもなお慎重に、男根を中へと進めていった。

「あっ……夕祐くんが……つく……わ、私のなかにい——んはああああン！」

それまでこちらの肩を掴み、自分を受け入れてくれていたまひるが、突然、後頭部を畳に叩きつけるようにして仰け反った。

膣壁たちも猛烈な勢いで、中の竿肌を締めつけてくる。

夕祐はその唐突すぎる相手の反応にハッとして、二人の結合部に視線を向けた。

「ツツツツツ!!」

そこからはまひるの処女を捧げられた証が、紅の筋となって滴り落ちていた。

「だ、だだ大丈夫!!」

お坊ちゃま育ちで血など見慣れていないだけに、夕祐の焦りも半端ではない。獣欲に沸騰していた意識が一瞬で恋人の心配に切り替わる。



尻の丸みはプリンプリンとしていて柔らかく、さらにその奥にある筋肉部分はしなやかな弾力に富んでいた。

下腹ではつきりと味わえる、そんな牝肉の二層構造が心地よく、ますます腰の動きが激しくなってしまう。

「はああん。だ、だめ……そ、そんなに激しくパンパンしちゃあ……つはあ……き、気持ちよすぎて、恥ずかしい声を我慢できないよおお！」

まひるは右手で口元を押さえつつ、左手だけを窓ガラスにつく不安定な姿勢で、両膝を激しくガクガクさせながら――。

「もうこれだけでイッチャうよおお！ あああ！ イクツ！ イッチャうううッ！」  
尻を中心にして全身を波立たせるように震わせ出した。

「ええ！ も、もう!? ――つくくうう!?」

夕祐は根本まで彼女の中にペニスを埋め込んだまま、一旦、激しい突入を止めた。

（うわあ!? これはこれで、すっごく気持ちいい!）

摩擦運動をしていないだけに、膣の内側をよりしつかりと味わえる。

彼女の中は初体験の時以上に蜜液が溢れていて、性器同士が蕩けてしまいそうな一体感だ。

そんな中でまひるは荒い呼吸を繰り返し、こちらに向けている尻を、ビクン、ビクンと

呼吸と違うタイミングで震わせていた。

蜜路もそれは同様で、その素晴らしい一体感の中、キュンキュンとペニスを突発的に引き絞ってくる。

（うわあああああ♡ 本当に、たったこれだけでイッチャったんだあ♡）

完全な絶頂とまでは言わないが、間違いなく達している。

他に女性経験などなくても、まひるが性に敏感なことは理解できる。

もともとそういう体質なのか、初体験を経てその感度に磨きがかかったようだ。

（今のまひるさん、どんな顔をしてるんだろう！）

夕祐は彼女の背中に覆いかぶさる姿勢を取ると、左手で彼女の細い顎を掴み、優しくこちらに引いた。

「あん♡」

栗毛の婚約者はまるで首の筋肉が溶けてしまったように、くにゃん、と手応えなく振り向いた。その大きな瞳を官能の涙でたつぷりと濡らし、半開きにした唇からは愉悦の涎をだらしなく垂らしている。

その色っぽすぎる表情に、夕祐の背筋がゾクンと震えた。

「イッチャったの？」

夕祐の問いに、まひるはトロンとした瞳のままコクンと頷く。

「僕のおちんちん、そんなに気持ちよかった？」

この問いにも、同じトロけ顔のままコクンと頷く。

一度軽く達したこと、セックス前まで見せていた極度の羞恥心が吹き飛んでしまったのか、なんだかとても従順だ。

（これはこれで、なんかめっちゃくちやエッチな感じだよおお！）

以前の誘惑バージョンとも、先ほどまでの恥じらいバージョンとも違う、第三のパターンである。

試しに彼女の胸をいやらしい手つきで揉みしだいても「ああん♡」と甘く喘ぐだけで、抵抗する素振りはない。

「……舌、出してみて」

そんなまひると猛烈にキスがしたいと思った夕祐は、彼女の胸を揉んだままそう命令してみた。

「ん♡」

まひるはこれにも従順に従い、半開きになっている唇から、ピンク色の綺麗な舌を出してくれる。

「もっと、限界まで」

「ん♡」



（うわあああ!? たままないよコレ!）

誘惑バージョンだろうと、恥じらいバージョンだろうと、夕祐の言うことを聞かなかったことに変わりはない。

それが今、自分に言われるがまま舌をいっぱいまで出して、とんでもなくイヤらしい顔を見せてくれている。

「このままベロチューするよ!」

強烈に獣欲を刺激された夕祐は、背伸びをするようにして舌を絡めていった。

「んん♡ つぷん♡ ゆうすけくうん♡ ンはあ♡ んんん♡」

彼女はすぐにこちらの興奮を察し、もともと窮屈な体勢にもかかわらず、より首を後ろに曲げて舌の動きを合わせてくれる。

——レロんちゅ、ちゅン♡ レロれるくちゅ♡

まひると性器でがっちりと結合したまま、彼女の胸を揉みしだきつつ、ねちつく舌を絡めあう。

視線をチラッと前に向けると、素晴らしい夜景に重なって、そんな自分たちの姿が窓ガラスに映っていた。

（うわあああ!）

トロンとした薄目で自分と舌を絡めあっている、まひるの恍惚とした顔がたまらない。

キスをしていたら距離が近すぎて、こうして窓ガラスにでも映らなければ、目にできなかった表情だ。

「んきやああん!? んはあ……あああああ♡」

そのまひるの美貌が、夕祐が強く腰を突いたため急に仰向く。

あまりにエロティックな彼女の表情に、牡の本能が勝手に反応してしまった。

「ツくふあ♡」

その直後、濡れた膣壁を鋭くえぐった男根から、腰の奥まで痺れるような快感が通り、夕祐の顎も軽く上がる。

（めちゃくちや気持ちいい♡）

このまま性欲に任せて腰を突いていたら、初体験の時のようにすぐに果ててしまう。

そう直感した少年は両手で彼女のウエストを掴み——くちゅん、ぬちゅッ、くちゅん♡

楕円を描くように、ねちっこく腰を動かし始めた。

「ああん♡ そんな風にお腹の中を、優しく掻き回すようにしちゃだめええ♡」

二人は半開きになった唇を唾液の糸で結んだまま、恍惚とした顔で甘く見詰めあう。

こちらのペニスの動きに合わせてまひるが悩ましげに眉を寄せ、頬を震わせながら官能の声を絞り出す。

（ふああ♡ こうするのが気持ちいいんだあ♡）

男根を入れるタイミングで腰の動きを速め、引くタイミングで蜜壺の中を掻き出すようにゆっくりさせる。

そうすると下腹に当たっている彼女の尻までもが、愉悦でプルプルと震え出す。

「す、凄いよお……夕祐クンに一番奥をグリグリ擦られてえ……あはああん♡　そ、そんな風に何度もされたら、またあ………イ、イッチャうよお♡」

「いいよ♡　また見せて♡　まひるさんのイッチャうところ、僕にいっぱい見せて♡」

彼女の膝も先ほどから再びガクガクと震え出し、その振動がペニスを包む膣壁まで伝わってきている。

彼女が見せるそのあまりに官能的な反応と、男根にもたらされるその極上の肉悦が、少年を限界へと追い詰めていく。

「あああ。も、もう、イキそうになってきちゃったよおお」

軽く顎の上がった姿勢のまま、熱っぽい吐息と共にそう絞り出す。

「んはあああ♡　わ、私もだよお♡　も、もう気持ちよすぎて、ずっと夕祐クンと見詰めあっていたのにい、も、もう、この姿勢でいられないよお♡」

彼女の喘ぎ声には微妙にビブラートがかかっていて、本当に切羽詰まっていることが強烈に伝わってくる。

（うわああああ♡　今のまひるさん、顔も身体もトロントロンにトロけちゃってて、めち

やくちやエロ可愛いよお♡)

夕祐は反射的にそんな相手とキスをしようと、舌を出しながら顔を近づけていた。まひるもこちらの意図を察し、官能の涙で濡れた瞳をうつとりと細くしながら再び「♡」と舌を出してくれる。そしてともと窮屈な姿勢だったにもかかわらず、夕祐の欲望に応えようと、その身体をさらにねじってくれた。

そんな婚約者の健気さに、少年の瞳がうつとりと細められた時——ぬるる♡

二人の舌が触れあい、頭髮が全て逆立ちそうなぬめった快感が炸裂する。今、心も身体も全てまひると一つになっている。

限界ギリギリの悦楽の中、愛する人との強烈な一体感が快感の雷となって、少年の全身を貫いた。

「あああああああああああああッッ！」

その瞬間、欲望のスイッチがバチンと入り——パンパンパンパンパパンッ！  
今までねちっこく楕円を描いていた腰が、痙攣にも似た激しい突入へと切り替わる。

「んはああああ！ ああああああ！ ああああああああああ！」

そのあまりの激しさに、まひるも身体の内側から弾かれたように前を向く。

ずっと窮屈な姿勢で身体をよじらせていたのが真っ直ぐになったため、出しやすくなった喘ぎ声を思いっきり張り上げ始める。

「もうイク！ イッチャう！ イッチャうよおおお！」

都心を見下ろす素晴らしい夜景の中で、正面を向いたまひるの豊かな栗毛が、自分の突入によって激しく揺れている。

官能のピンク色に染まった牝尻が自分の下腹に打たれて激しく揺れ、その中心でアナルが限界までキュウウーと窄まっている。

「はああん！ 出してええ！ このまま私の中で夕祐クンのをぶちまけてえええ！」

露骨に膣内射精を求めるまひるの声で、その視線が上を向く。と、立ちバックの姿勢を支えるために窓ガラスについている、彼女の左手が視界に入った。

無数のライトが輝く夜景の中で、一際綺麗に婚約指輪が輝いている。

それを見た瞬間『まひるはもう自分のものなんだ』と強烈に認識し――。

「本当に出すよおお！ このまま、まひるさんの中に、僕のザーメン全部出しちゃうからねえええ！」

両手で彼女のウエストをがっちり掴み、何があろうと絶対に中出しする、という強烈な決意の中、射精直前の小刻みな突入を繰り返す。

「ああんッきてえええ！ まひるの中をゆうすけくんで、いっぱいにしてええええ！」

「まひるさんッ！ まひるさんッ！ ああああああ、まひるううううううう！」

夕祐はそう絶叫すると同時に、思いつき腰を突き入れ動きを止めた。

己の肉先が彼女の子宮孔をグプンと捉えた確かな手応えに、魂の奥底まで快感に痺れさせながら全身を息ませる。

——ドリゅん！ ドリユどぎゅん！ ドブドブどぎゅドブン！

極限まで硬直したペニスの内側をブチ抜くように灼熱の粘液が進り、婚約者の子宮へと直接吐き出していく。

なんて気持ちいいんだろう。

全身を過去最高の快感に震わせながら、魂ごと彼女の中にぶちまけるような、壮絶な脈動を続ける。

「んはああああ！ でてるううう！ 夕祐クンの熱いのがああ、私の中にドクドク注ぎ込まれてるうううう！」

そんな中、まひるは顎を天井に向けるほど大きく仰向けせ、全身をビクビクと鋭く震わせる——ぷしやああああああああああああああ！

盛大に潮を吹き出した。

二人はそのまま長く絶頂を極めあう。

夕祐は極限の快感の中、幻想的なまでのまひるとの一体感を味わっていた。

彼女の向こうに、都心を見下ろす夜景が広がっているのも、その気分には拍車をかける。

しかも絶頂している時の膣内は、突発的な締めつけと鋭い痙攣が何度も繰り返され、射



精を続ける男根にさらなる肉悦をもたらした。

「つふあ……つくふあ……ふはあああ♡」

そうして夕祐は全てをまひるの中に注ぎ込むと、無意識に止めていた呼吸を再開させ、力いっぱい握りしめていた彼女のウエストも解放する。

「あはあん……」

まひるは立ちバックの姿勢を維持できず、その場につくりとへたり込んだ。

彼女はいまだ官能の彼方に意識を吹き飛ばしたままのようで、その美貌を窓に寄りかからせながら臉をうつとりと閉じ、ハアハアと荒い呼吸を繰り返している。

夕祐も肩で息をしながら部屋に備えつけてあるティッシュで自らの股間を拭くと、ケースごとそれを手に取り彼女がへたり込んでいる床に片膝をついた。

「大丈夫？」

いまだにその女体をヒクヒクと突発的に痙攣させている、まひるの顔を覗き込む。

彼女はこちらの声を聞いてもすぐには反応せず、十数秒後にやっと閉じていた臉を開いた。そして、いまだに官能の世界を見ているのであろう、焦点のあっていない瞳を宙にさまよわせる。

「……ふあ？」

その瞳がやっとこちらに向いた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takent Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!